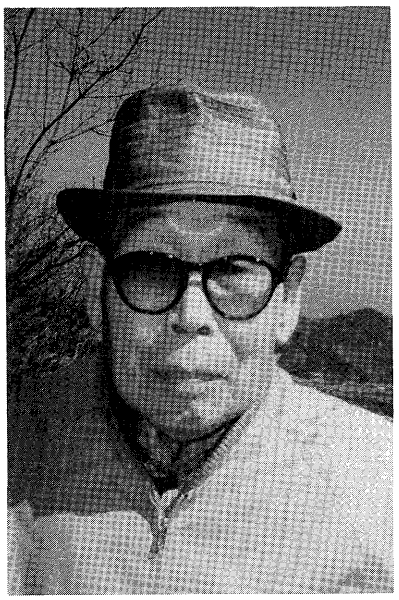
ヤしたことが何度かなかったとは言えませんが，いつでも植物学の前途を見つめながら真の善意から迸り出たその言葉に，一旦は辟易しても，いずれは心からの協調を覚えたというのが多くの人の経験だったのではないでしょうか．口が悪いと零しながら，西田先生のことを悪し様にいう人がないのはそのことをよく物語る事実です．

平均年齢が高くなった日本の今日では，まだまだ慌てて冥界へ旅立つという年令ではなかったのですが，2人の息子たちも植物学者として大成の見通しをもち，多様性の生物学がそれなりに発展の兆しを見せるようになった今，俺はあっちでお前たちがちゃんとやるかどうか見てるからな，とおっしゃっているのが見えるようなお別れだったような気がすることです．（岩槻邦男）

奥山春季さん追悼
Mr. Shunki Okuyama（1909–1998）



Mr. Shunki Okuyama (1909–1998)

山形県東根町（現，東根市）で1909年1月1日に生まれられた．野草が好きで，千葉高等園芸（現，千葉大学園芸学部）を卒業し，1932年東京科学博物館(現，国立科学博物館)に入った．当時は高等植物関係はお年を召した根本莞爾氏のみであったが，氏の加入で館はにわかに若返った．しばしば野外の植物採集会を牧野富太郎先生，久内清孝先生の助力で行い，1974年退官するまで，年間20回を超える採集会を行ったことが10ヶ年もあった．このため参加する会員も増し，館の標本も充実した．しばしば一般会員の自慢の「おし葉展」を開き，これは科博の大切な年中行事となり，退職までに35回を数えた．これが全国のアマチュアのレベルを高めた効果は，はかり知れない．

研究発表は「ヒメミソハギ男鹿半島に産す」（自然科学と博物館，1933年）が初めで，その後，植物研究雑誌（以下植研と略）10巻（1934年）にイノコズチ属の研究を二編発表した．これは大変念の入った論文で，今でもむづかしい属であるが入念に仕上げてある．その後植研にいろいろ研究ノートを出したが，「日本産植物雑記」1～7（1936－1943年）は本格的な評論を展開している．ここでは回を重ねるに従って広範な科に触れるようになった．しかし私がひそかに考えるところでは，この論文の後の方では，氏はいささか息を切らしているらしい様子が感じられる．研究対象をしぼる必要が生じたのであろう．氏の最終目的は後で紹介するように，日本の各地域の小フロラをまとめて一書にすることではなかったかと想像する．その手始めが「植物採集覚書1」（植研21巻，1947年）で，この連作は同33（植研47巻，1972年）まで続き，25年間に亘る労作にピリオドを打つに到る．この連作と少し重複して「植物採集ニュース」（第1号，1962年）なる薄いパンフレットが不定期に発行されはじめ，1974年国立科学博物館の退官を経て，1978年第100

号で終刊となる．これは氏の監修および弟子筋の人々の助力で発行されたものである．遠方の同好者や研究者連中の投稿も多くなり，多くの読者を得た．氏はこの出版物に関係して，ニュースの会としての採集会その他諸種の会合を持った．さらにこれを引き継ぐように「レポート日本の植物」第1号が1979年に出版され，1988年に終刊となる．1991年私費出版された「植物採集記録抄」は，氏の1988年までの一生のサマリーであるが，その「付」の部分は75－124頁が「日本植物探訪記」，125－133頁が写真版で，私には本格的な随筆と思われる．

さて氏の植物学的な労作である「採集・検索日本植物ハンドブック」(1974年，八坂書房)は，北は礼文・利尻両島から南は屋久島に到る約200地域（山岳，河川，平地）の小フロラをまとめ，これらの地域の一木一草，シダ植物に到るまでを自ら記録したもので，市場の要求も多く，他の追従を許さない，いわゆる名著である．この書の第一版に当たる「植物採集ハンドブック」(副題 Handbook for plant collectors)(1953年，和田書店)は氏の初めての出版書である．「原色野外植物図譜7巻」(1957－1963年，誠文堂新光社)は，全国の同好者の協力を得て，生植物の全形をカラー写真で示したきわめてユニークな作品である．氏にはほかにも数かずの著書があるが，夫人和子氏と共著のお茶花図鑑があり，氏自身の他の学術雑誌への投稿も少なくない．しかし「ハンドブック」は，博物館にほぼ一生をかけた奥山さんの，社会への記念品である．

「レポート日本の植物」の終刊頃から足の故障を訴え，野外活動は中止状態となり，もっぱら机上でのワープロの仕事となる．本来口数の少ない人なので，夫人も重大な病気とは思っていなかった由で，パーキンソン氏病であることが入院後判った．1998年12月10日死去．小生の囲りから，また一人大切な人を失った．残念に耐えない．氏は山形県人らしく，言葉少なの温厚な方であったが，身体は頑健で，内面的に意思は強く，極めて計画性に富んでいたように見える．和子夫人は女高師の物理化学の専攻科を卒業したが，植物にも非常に興味を持ち，野外で氏の熱心な弟子であったが，後に夫人となり，家庭の内外ともに最もよい協力者と伝えられる．出版物，標本などが細やかに整理されたのは，夫人の力を抜いては考えられない．(津山　尚)